

■第六巻

一	哲学者(⇨盲人)とは <ul style="list-style-type: none"> ● 真実在を確実に認識している ● 経験も徳性もほかの人に劣ることがない
二	哲学者の自然的素質とは <ol style="list-style-type: none"> ① 真実在を開示してくれる学問に対して、つねに積極的な情熱をもつこと ② 偽りを憎しみ、“あらゆる”真実を憧れ求め、正義と勇気と節制を愛すること → 欲望が、すべて学問や真実に向かっている場合は、魂が純粹にそれ自身だけで楽しむ快樂だけに関わる。 ③ 端正で、物欲がなく、けちではなく、ほら吹きでもなく、臆病でもないこと ④ 記憶力がよく、ものわりのよい魂であること(四苦八苦しなければ成果をあげられないとすると、仕事を憎み、自分が嫌になるだけだから) ⑤ 生まれつき度を守り、優雅さをそなえた精神であること
三	議論への違和感 アデイメントス「下手な碁を打っているように、少しずつ議論を逸らされて、気づけば閉じ込められて口を封じられてしまっているようだ。言葉のうえでの議論には同意できるが、実情に目を向けるならば、最も優秀だと思われる人でさえも、次第に役に立たない人間となってしまっているものだ」
四	哲学者が役に立たないと思われる理由 一隻の船の比喻 真にひとつの船を支配するだけの資格を身につけるには、年や季節のこと、空や星や風のこと、その他技術に本来的な関わりのあることを注意深く研究しなければならないのに、水夫はあらゆる手段をつくして支配権をにぎろうとし、自分を助けてくれる人のことを「まことの船乗りだ」と褒め讃える。 → すぐれた人物たちがおかれている国の状況はあまりにもひどい。 → 『星を見つめる男』は役立たずだと呼ばれるが、役に立たないことの責めは、役に立てようとしぬ者たちにこそ問うべきである。
五	哲学者が健全で正しい品性や節度を随伴する真実に導かれるならば、碌でなしになるはずはないのでは。
六	墮落の原因 <ol style="list-style-type: none"> ① 勇気や節制など自然的素質 ② 一般に『善いもの』と思われる、美しさ、富、身体の強さ、親族関係など ③ ソフィストによる悪い教育と不当な強制力
七	④ 哲学者たりえない大衆からの影響 <ul style="list-style-type: none"> ● 多く人は、絵画でも音楽でも政治でも、<必要なもの>を考えず、群衆の気質や好みを<善いもの>と考え、それをよく心得ていることをもって<知恵>をもっていると考えている。
八	<ul style="list-style-type: none"> ● 身内や同国民は、哲学的素質を持ち、幼い頃から能力を発揮する若者に目をつけてひれ伏す。 → その若者は自分の能力を信じ込み、知性を欠いたまま、野望ともったいぶった態度とむなしい自尊心に満たされ、思い上がった高慢な人間になってしまう。 → 誰かが真実を告げたとしても、周囲の連中の個人的陰謀に妨害されてしまう。 ⇒ すぐれた素質をもっていたとしても、哲学を続けていくことは不可能になる。
九	⇒ 哲学が結ばれる相手として最もふさわしい人たちは脱落していき、代わりに教養に値しない人々が哲学に近づいて、<にせ知識>(詭弁)を生み出す。
一〇	⇒ 哲学者の自然的素質をもった残った少数の人々は、役に立つことをするよりも以前に身を滅ぼすと、自己自身に対しても他人に対しても無益な人間と終わるほかないから、他の人々の目に余る不法を見ながらも、自分自身で美しい希望を抱いて満足する。
一	国家による哲学の扱い方 若い頃にはそれにふさわしい教養と哲学を身につけ、大人になりつつあるころには身体に配慮し、年齢が長じて魂の発育が完成期に入ったとき知的訓練を強化し、体力が衰えたら一切を投げうって哲学に専心する。

一 二	ここまで議論してきたような国制は現実可能か 実際に見たことがないのだから、大衆が納得しないのも当たり前だが、哲学者たちが国に配慮するよう強制されるか、王位にある人々が哲学への恋情に取りつかれることが現実にはないという根拠はないので、困難であるが不可能ではない。
一 三	哲学者のしごと 画家の比喻 画布の汚れを拭い去って清らかにし、国制の形態を下書きし、真実在と人間を見比べて、人間の営みのさまざまな要素を混ぜ合わせて、人間の品性を可能なかぎり神に愛される性格につくり上げる。
一 四	ソクラテス「これらの案は、もし実現できれば最善のものである、しかるにその実現は、困難であるけれども決して不可能ではない。」
一 五	支配者となるべき哲学者に最大の学業によく堪えうるような自然的素質があるか、観察しなければならない。 最大の学業とは
一 六	これまでの議論に満足せず、最大限の正確さを求め、できるだけ明晰に緊張努力して知らなければならない。 最大の学業とは、 <u><善>の実相(=イデア)</u> に関するもの。
一 七	<善>とは ×知恵(善を知ること) ×快樂 正しいことや美しいことは、そう思われることをする人が多いが、善いものとなると、実際にそうであるものを求めなければならない。正義や美がいかなる点で善いものなのかがわからなければ、哲学者も意味がない。
一 八	⇒しかし、<善>それ自体がそもそも何であるかは論じきる自信がないので、さしあたり<善>に最もよく似ている子供を語る。 イデアとは いろいろなそのものではないが、<まさにそれぞれであるところのもの>であり、思惟によって知ることができ、見られることはないもの。 ● 視覚とは、聴覚や感覚などとは違い、「光」という第三のものを必要とするもの。
一 九	また、最もよく見られるようにする「光」は、太陽。 ● 太陽とは、視覚そのものではないが、視覚の原因であり、視覚そのものによって見られるもの。 ⇒<善>の子供は太陽である。 <知るもの>(=魂、認識)が知性をもっていると明らかになるためには、善によって<知られるもの>(=正義、美などの真理)が照らされなければならない。それと同様に、<見るもの>(=目)が視力を持っていることを明らかにするには、太陽によって<見られるもの>が照らされなければならない。
二 〇	線分の比喻 ※ AC:CB=AD:DC=CE:EB